

島根県津和野町教育委員会

【総人口】6,537人

【自治体 関連URL】<https://www.town.tsuwano.lg.jp>

【主担当部局】津和野町教育委員会
(公立小学校担当)

【主な関係部局】津和野町健康福祉課
(保育所・認定こども園担当)

	幼稚園			保育所		幼保連携型 地域裁量型		小学校		
	国立	公立	私立	公立	私立	公立	私立	国立	公立	私立
施設数				2	4		1		4	
園児・ 児童数				31	110		21		237	

事業実施地域・ 協力園校	【実施地域】 津和野町日原地区
	【協力園校】 保：公立保育所1園、私立保育所1園、地方裁量型認定こども園1園 小：公立小学校1校

架け橋期の カリキュラム開発 会議	【会議委員人数】 16名	【開催数】 4回
	【委員属性】 公立保育園長1名、私立保育園長1名、保育士1名、私立認定こども園長1名、公立小学校長1名、教諭1名、大学教授2名、国際 関係機関教育部局担当者1名、保小連携CN1名、幼児教育CN1名、町福祉担当者1名、町学校教育担当者4名	

架け橋期の コーディネー ター等	【配置人数】 2名
	【経歴】 ・元教員 ・元保育士

架け橋期の カリキュラム	【開発主体】 日原地区（1 公立保育園、1 私立保育園、1私 立認定こども園、1 小学校）
-----------------	---

カリキュラム開発会議

①実践テーマの設定について

1年目となる令和4年度には、学校と保育園のそれぞれが目指したい理念やビジョンによるものではなく、「地区で育てたい子ども像」という共通テーマについて話し合う中で、お互いが大切にしたい事として、「探究」「対話」「協働」の3つのキーワードが示された。

今年度、この3つのキーワードに基づいて共同実践を行う中で、子どもたちが話し合ったり、協力したりする環境を設定しても、その活動に興味がない場合には、すぐに飽きてしまう事がわかった。一方で、本当に好奇心を持って活動している時には、さらに探究する姿が見られるとともに、一人では難しい時には自然と他の子どもと話しあったり、協力したりする姿が見られた。このことから、まず環境設定を行う上で、「探究」を中心に置くことで「対話」「協働」する力にもつながるという結論に至り、津和野町の架け橋カリキュラムのテーマを「探求」に絞るとともに、期待する子ども像として、「好奇心から始まり、対話と協働を通して自己実現がはかれる子」とする方針を定めた。

また、カリキュラム作成にあたっては、小規模自治体の特性を活かして津和野町内で共通となるカリキュラムを作成する事とし、津和野町の主要施策として教育ビジョンにも定めている「0歳児からのひとつづくりプログラム」に示した「目指す子ども像」との整合性も図りながら進めることとした。これにより、架け橋期だけの取り組みにするのではなく、小学校全体としての取り組み、小中高の接続の取り組みへと繋げていく基礎となった。

②会議設置による成果と課題

開発会議を設置したことにより、有識者から様々な情報提供を受けながら、学校と保育園の大切にしている事を共有し、相互理解を深めることができた。これにより、子どもの姿を同じ目線で確認しながら、子どもが安心して遊びや学びに向かう事が出来る言葉がけや環境設定について、大人同士が自然と話し合える雰囲気醸成されている。

課題としては、令和5年度は共同実践を中心に様々な目的やねらいをもって実践を行ったが、コーディネーターを中心とした支援体制があったからこそできたものもあり、持続可能なカリキュラムの構築には、教員や保育士の負担感を取り除き、学校全体の理解と協力体制が必要となる。研究事業が終了した後も、負担感が増すことなく持続できるような体制構築と、より効果的な実践内容を検討する必要がある。また、モデル校における共同実践の目的は、当日の子どもに対するねらいに加え、学校や保育園における日常の実践においての子どもの姿や環境設定などの現在地を学校と保育園の双方で確認し合うとともに、言葉がけや環境設定の考え方を話しあう事でお互いの理解を深め、必要に応じて見直しを行っていく事にある。このことを踏まえたうえで、負担感が出ないような実施時期や回数を検討する必要がある。

津和野町における架け橋カリキュラムのビジョン

Vision

子どもたちが安心して生活ができ、探究心が育まれる環境を創る

期待する子ども像

好奇心から始まり、対話と協働を通して自己実現がはかれる子

育てたい観点

対話

探究

協働

根底にある安心感



架け橋期のカリキュラム

○開発プロセスについて

- ・昨年度に学校と保育園で話し合いの中からまとめられた「探究」「対話」「協働」をテーマとして、学校と保育園が同じ目線で子どもの姿を見るための指標を作成した。指標案は、開発会議の委員でもある保小連携コーディネーターと幼児教育コーディネーターが「幼児期の終わりまでに育ってほしい10の姿」や津和野町が定めている「0歳児からのひとづくりプログラム」の育てたい力（対話する力、課題を見抜く力、行動・創造する力）などを参考に作成。
- ・共同実践において、指標案をもとに教員と保育士が子どもの姿を記録し、振り返りの会において共有を行うとともに指標案の修正点などが話し合われた。
- ・2回目の共同実践の際にも修正案を使用して、子どもの姿の共有を図った。この回の振り返りにおいて、これまで「探究」「対話」「協働」の3つで子どもの姿を見てきたが、項目が多いことで、共同実践の中で、子どもの姿が見切れないという課題が提示された。また、子どもが好奇心を持って活動している時に、一人で解決できない場合には自然と話し合ったり、協力し合ったりする姿が見られたという事から、開発会議において「探求」を中心テーマにするのが良いのではないかという結論に至った。
- ・架け橋期のカリキュラム作成は、これまでの開発会議での議論を踏まえて、「探求」に関する指標案をベースに、カリキュラムに落とし込んでいく事とした。また、架け橋期の終わりまでに育ってほしい姿として、「好奇心」「思考力の芽生え」「振り返り」に分解した案をコーディネーターが作成し、学校、保育園で内容を確認するとともに、有識者の意見も頂きながら、ブラッシュアップを行った。
- ・また、カリキュラム作成の過程において、子どもの姿に合わせて、大人がどういう言葉がけや環境設定を心掛ける必要があるのかを示した方が良いのではないかという議論がなされた。このことから、「大切にしたい大人の姿勢」についてもカリキュラムに示す事とした。



会議にてそれぞれの園・学校の教育目標や子ども像、姿を出し合いながら、共通項を落としていく。



5歳児と1年生の共同実践を通じて、育ってほしい姿がどんな環境で見られたかなど、「子どもの姿ベース」での見とり。



見とった場面を振り返りながら、「子ども主体」に繋がっていく文言を修正しつつカリキュラムに反映していく。

架け橋期のカリキュラム

○架け橋期のカリキュラムの概要について

・カリキュラムの構成として、「期待する子ども像」や「架け橋期の終わりまでに育ってほしい姿」については、津和野町内の全小学校区で共通となるカリキュラムとして作成した。また、「大切にしたい大人の姿勢」を示し、教員と保育士が共通して意識することで、保小間の環境ギャップを少なくすることを意識した。

・それ以外の項目については、各地域の関係園・校数の違いや地域の特徴を活かした計画を作成する必要があることから、小学校区ごとに作成する事とした。

・既存の指導計画は、10の姿について全般にわたり計画されているが、架け橋期のカリキュラムについては、好奇心や思考力の芽生えに焦点を絞っている。これは、それぞれの園の特色を活かしながらも、全ての園が大切にしたいと考えている項目であったためである。

[illegible]

○架け橋期のカリキュラムの実践について

- ・日常の指導において、子どもが興味関心を持って取り組む事ができる環境設定や安心して遊び込んだり、学びに向かうための言葉がけなどを意識するようになった。

・共同実践において、子どもが遊び込んだり、関心を持ったことにしっかりと取り組めるための言葉がけや時間を担保するなど関わる大人が共通の意識を持ちながら関わることにより、関心を持ったことを深堀する姿や色々な方法を試す姿、協力して取り組む姿などがより多く見られるようになった。



次年度への展望

○令和6年度の取り組みについて

最終年度となる令和6年度の主な取り組みは、モデル地区で作成したカリキュラムをもとに、津和野町内の他の小学校区へ拡大し、全ての小学校において架け橋期のカリキュラムの実践を行う予定である。

モデル地区である日原小学校区とその他の小学校区では進捗が異なるため、支援体制を分けて考える必要がある。

・モデル地区である日原小学校区については、作成したカリキュラムが持続可能なカリキュラムとなっているのか検証を行いながら、より効果的な実践となるための検証と実践を引き続き行う事としている。また、他の小学校区へのサポートを行いながら、他の小学校区で出た意見等の集約を行い、共通のカリキュラムへの反映を行う。

・他の小学校区については、地域によって規模や特色が異なるため、それぞれにあった会議体を立ち上げ、まずは学校と保育園の相互理解を深める取り組みを進める。また、支援体制として、これまでコーディネーターを中心に行ってきたが、拡大するにあたって、教育委員会事務局職員を各小学校区の担当に配置し、教員や保育士の過度な負担とならないようサポートを行いながら、伴走する体制を構築する。また、規模の違いなどにより、共同実践の必要性や目的に意識の違いがみられるため、地区ごとに何のために共同実践を行うのかをしっかりと議論したうえで、実践回数や時期について設定を行うことが重要だと考えている。

○0歳児からのひとづくり事業への展開について

これまで実践してきた架け橋期の取り組みは、津和野町が推進する「0歳児からのひとづくりプログラム」の中の、「タテの連携」として位置づけたものであり、0歳から18歳までの連続性をもった教育環境の構築に向けた第1歩と捉えている。この取り組みを契機とし、まずは小学校全体で共有し、さらに小中接続、中高接続へと発展させていく事が重要であると考えている。